

名前 (                      )      日づけ (      /      )      できた数 (      / 28 )

**使い方** 書き下し文を声に出して読んでから、傍線の番号を手がかりに解きます。この文章の山は反語（⑨「何ぞ～ざる」⑫「安くんぞ～んや」）、⑥「放たる」の受身、そして屈原と漁父の生き方の対比です。

**あらずじ**＝楚の国を追われた屈原が、やつれ果てた姿で川のほとりをさまよっていると、漁師の老人が声をかける。屈原は「世の中はみな濁っているのに自分ひとりが清く、人々はみな酔っているのに自分ひとりが醒めている。だから追放されたのだ」と答える。漁師は「聖人は物事にこだわらず、世とともに移っていくものだ。みなが濁っているならいっしょに泥をかき混ぜ、みなが酔っているならいっしょに酒かすを口にすればよいではないか」と、世に合わせて生きるよう勧める。しかし屈原は、川に身を投げて魚の腹に葬られようとも、清らかな身を俗世の汚れにさらすことはできないと言い切る。漁師はにっこり笑い、「滄浪の水が澄めば冠のひもを洗い、濁れば足を洗えばよい」と歌いながら、舟をこいで去っていく。

【冒頭（屈原の姿）】

屈原（くつげん）既（すで）に放（はな）たれて、江潭（かうたん）に遊（あそ）び、行（ゆ）き行き沢畔（たくはん）に吟（ぎん）ず。顔色（がんしよく）憔悴（せうすい）し、<sup>①</sup>形容（けいよう）枯槁（こかう）せり。漁父（ぎよほ）見て之（これ）に問（と）ひて曰（い）はく、「<sup>②</sup>子（し）は三閭大夫（さんりよたいふ）に非（あら）ずや。<sup>③</sup>何（なん）の故（ゆゑ）に斯（ここ）に至（いた）れる」と。

【屈原の言葉】

屈原曰はく、「<sup>④</sup>世（よ）を拳（あ）げて皆（みな）濁（にご）れるに、我（われ）独（ひと）り清（す）めり。<sup>⑤</sup>衆人（しゅじん）皆（みな）醉（ゑ）へるに、我独り醒（さ）めたり。<sup>⑥</sup>是（これ）を以（もつ）て放（はな）たる」と。

【漁父の勧め】

漁父曰はく、「聖人（せいじん）は<sup>⑦</sup>物（もの）に凝滞（ぎようたい）せずして、<sup>⑧</sup>能（よ）く世と推移（すいい）す。世人（せいじん）皆濁らば、<sup>⑨</sup>何（なん）ぞ其（そ）の泥（どろ）を漉（に）して其の波（なみ）を揚（あ）げざる。衆人皆（みな）醉（ゑ）はば、<sup>⑩</sup>何ぞ其の糟（かす）を舗（く）らひて其の醢（り）を歡（すす）らざる。」と。

【屈原の拒絶】

「…<sup>⑪</sup>寧（むし）ろ湘流（しやうりう）に赴（おもむ）きて、江魚（かうぎよ）の腹中（ふくちゆう）に葬（はうむ）らるゝとも、<sup>⑫</sup>安（いづ）くんぞ能く皓皓（かうかう）の白（しろ）きを以て、世俗（せぞく）の塵埃（ちんあい）を蒙（かうさ）らんや」と。

【結び（漁父の退場）】

漁父（ぎよほ）<sup>13</sup> 莞爾（くわんじ）として笑（わら）ひ、<sup>14</sup> 枹（えい）を鼓（こ）して去（さ）る。乃（すなは）ち歌（うた）ひて曰（い）はく、「<sup>15</sup> 滄浪（さうらう）の水（みづ）清（す）まば、以て吾（わ）が纓（えい）を濯（あら）ふべし。滄浪の水濁（う）らば、以て吾（わ）が足（あし）を濯（あら）ふべし」と。

屈原＝中国の戦国時代、楚（そ）の国の政治家で詩人。王と同じ一族の出。既に放たれて＝すでに（朝廷を）追放されて。江潭＝川の深いよどみのあたり。川（せ）り。

沢畔ニ沼や沢のほとり。吟ずニ声に出して詩をつたう。うたつて嘆く。顔色憔悴ニ顔つきがやつれること。形容枯槁ニすがたが、木が枯れたようにやせ衰えること。  
 sen 漁父

三年老いた漁師。読みは「ぎよほ」とする本が多いが、「ぎよふ」と読む本もある。お使いの教科書に合わせてください。子＝あなた。相手を敬つていう二人称。三閼木天三

楚の官職の名。王族三氏（昭・屈・景）に関するをつかさどったとされる役で、屈原がついていた職。斯に至れる＝こんなありさまになってしまった。世を挙げた三世

の中じゅう。清めり＝清らかである。醒めたり＝酔いがさめている。正氣でいる。是を以て＝そついうわけで。凝滞＝物事にこだわって、そこにとどまり行きづまること

推移すニ移り変わっていく。ここでは世の移り変わりに合わせていくこと。渾すニかき混ぜて濁らせる。「にごす」と読む本が多いが、「みだす」と読む本もある。お使いの教

科書に合わせてください。糟＝酒かす。醕＝味の薄い酒。歠＝すすする。飲む。寧ろ＝いっそのこと。二つを比べて一方を選ぶ言い方。湘流＝湘水（今の湖南省を流れる全

川の流れ。皓皓＝白く輝くさま。けがれのないさま。塵埃＝ちりやほこり。ここでは俗世間の汚れ。蒙る＝身に受ける。かぶる。莞爾＝につこりとほほえむさま。金と櫃＝

舟をこぐかい（かじ）。ふなべりとする説もある。鼓す＝打つ・動かす。「柁を鼓して」は、かいを動かして舟をこぎ出すこと（ふなべりを打って拍子をとる、と説明する本も

ある。乃ちニそこで。滄浪ニ川の名。青々とした水の意とする説もある。纓ニ冠を頭にとめるひも。冠は役人である身分を表す。※本文は元の記事のとおり、途中を省い

【】の見出しと「…」（省略のしるし）も元の記事のままにしています。※ここに載せた本文は、『楚辞』に収められた「漁父」（漁父辞）の形です。

『史記』屈原賈生列伝にも問答の前半はよく似た形で載っていますが、結びの「漁父莞爾として笑ひ…滄浪の水…」の部分は『史記』にはありません。ほかに『史記』には

A 語句の意味と読み（1～7）

- (1) ① 「形容枯槁せり」の読みを、すべて平仮名（現代仮名遣い）で書け。
- (2) ② 「子は三閭大夫に非ずや」の「子」の意味を書け。
- (3) ③ 「衆人皆醉へるに、我独り醒めたり」の「醒めたり」の意味を書け。
- (4) ④ 「何ぞ其の糟を餉らひて其の醜を敵らざる」の「糟」と「醜」の意味をそれぞれ書け。
- (5) ⑤ 「安くんぞ能く皓皓の白きを以て、世俗の塵埃を蒙らんや」の「皓皓の白き」とはどのようなことか、意味を書け。
- (6) ⑥ 「莞爾として笑ひ」の「莞爾」の意味を書け。
- (7) ⑦ 「滄浪の水清まば、以て吾が纓を濯ふべし」の「纓」の意味を書け。

B 句法（8～13）

- (8) ⑧ 「子は三閭大夫に非ずや」の「非ずや」は、どのような言い方か。意味もあわせて書け。
- (9) ⑨ 「是を以て放たる」の「放たる」を文法的に説明せよ。
- (10) ⑩ 「何ぞ其の泥を漏して其の波を揚げざる」の句法の名前を答え、どのような気持ちで言っているのかもあわせて書け。
- (11) ⑪ 「寧ろ湘流に赴きて」の「寧ろ」はどのような言い方か。あとに続く「葬らるとも」の「とも」の意味もあわせて書け。
- (12) ⑫ 「安くんぞ能く皓皓の白きを以て、世俗の塵埃を蒙らんや」の「安」の読みを現代仮名遣いの平仮名で書き、句法の名前も答えよ。（本文のルビは歴史的仮名遣い）
- (13) ⑬ 「滄浪の水清まば、以て吾が纓を濯ふべし」の「清まば」はどのような条件を表すか。また「濯ふべし」の「べし」の意味も書け。

C 主語・指す内容（14～17）

（14）③ 「何の故に斯に至れる」は、誰が誰に問いかけた言葉か。また「斯に至れる」とは、どうなったことをいうのか。

（15）⑥ 「是を以て放たる」の「是」は何を指すか。

（16）⑨ 「何ぞ其の泥を渥して其の波を揚げざる」は誰の言葉か。また、誰に何を勧めたものか。

（17）⑭ 「枻を鼓して去る」の主語は誰か。また、その人物が去っていったのはなぜか。

D 口語訳（18～21）

（18）④・⑤をふくむ「世を挙げて皆濁れるに、我独り清めり。衆人皆酔へるに、我独り醒めたり」を口語訳せよ。また、この二文に用いられている表現技法を答えよ。

（19）⑦・⑧をふくむ「聖人は物に凝滞せずして、能く世と推移す」を口語訳せよ。

（20）⑨ 「何ぞ其の泥を渥して其の波を揚げざる」を口語訳せよ。

（21）⑫ 「安くんぞ能く皓皓の白きを以て、世俗の塵埃を蒙らんや」を口語訳せよ。

E 内容・記述 (22～25)

(22) ① 「形容枯槁せり」とあるが、屈原がこのような姿になっているのはなぜか。本文に即して書け。

(23) ⑧ 「能く世と推移す」とあるが、漁父はこの生き方を、続けてどのような具体例に言いかえているか。⑨・⑩をふまえて四十字以内で書け。

(24) ⑫ 「安くんぞ能く皓皓の白きを以て、世俗の塵埃を蒙らんや」には、屈原のどのような生き方が表れているか。⑪もふまえて書け。

(25) ⑮ 「滄浪の水清まば、以て吾が纓を濯ふべし」に続けて、漁父は「滄浪の水濁らば、以て吾が足を濯ふべし」と歌う。この歌はどのような生き方を表しているか。屈原の生き方と対比して書け。

F 文学史・故事（本文全体をふまえて答える）(26～28)

(26) この文章の主人公である屈原は、いつの時代のどこの国の人で、どのような人物か。簡単に書け。

(27) この漁父との問答を載せた本文は、どの書物に収められたものか。あわせて『史記』の作者名と、その歴史書の書き方（体裁）も書け。

(28) 屈原はこののちどうなったと『史記』に記されているか。書け。

【テスト直前チェック】この三つ ①反語が二か所。⑨「何ぞ～ざる（どうして～しないのか＝そうすればよいではないか）」と⑫「安くんぞ～んや（どうして～できようか、いや、できない）」。訳の言い切り方まで書けるようにしておく。②⑥「放たる」は受身。白文「是以見放」の「見」が受身の印。「放つ」の未然形＋助動詞「る」で「追放される」。「見」を「みる」と訳すと即アウト。③答えの軸は屈原と漁父の対比。清らかさを守って妥協しない屈原と、世の濁り具合に合わせて身を処す漁父。記述問題はほぼここに集まります。